

あたふくかぜ 予防接種

おたふくかぜは合併症として髄膜炎や難聴をおこすことが少なくなく、決して軽い病気ではありません。

あらかじめ予防接種を受けて、子どもたちをおたふくかぜから守るように心がけて下さい。

日本小児科学会では2回の接種を推奨しています。



世界の
子どもに
ワクチンを
日本委員会

一口メモ

予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

○受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知っていてほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からぬことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。

○健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。

○前日は入浴して、体を清潔に。

○予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。

○母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）

○接種の会場で、体温を測り、記入します。

○予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見てください。

○接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。



おたふくかぜ（流行性耳下腺炎、ムンプス）は、おたふくかぜウイルスによっておきる感染症です。

最も多い症状は、唾液を作る耳下腺の腫れ（はれ）です。約1週間腫れが続き、その間は伝染力もあるため、登園（校）停止の扱いです。

おたふくかぜには様々な合併症があります。一番問題になるのは難聴です。通常は片側の耳だけですが、内耳の聴神経が壊されてしまいます。この難聴には有効な治療法がなく、永続的なものです。頻度もおたふく患者の数百人～数千人に一人の割合とされていて、そうとう多いものです。

また、髄膜炎も合併症として問題になります。これはおたふくかぜウイルスが中枢神経（脳、脊髄）の中に入り込みやすいためにおきる合併症です。おたふくかぜにかかった子どもたちの1～3%におきるといわれています。

また、成人男性がかかると、睾丸炎（こうがんえん）などがおきることもあり、こわがられています（約30%）。成人女性も卵巣炎をおこすことがあります（約7%）。いずれも通常は片側だけですが、その側の生殖能力は失われます。

おたふくかぜワクチンの副作用には、軽い耳下腺炎の腫れや、髄膜炎症状がおきることがあります。いずれも程度は軽く、後遺症などをおこすことはまずありません。

おたふくかぜはワクチン接種によって予防できます。軽い病気と思われていますが、できれば保育園・幼稚園にあがるまえに受けておかれるといいと思います。また、大人の方も、まだかかったことがないようでしたら、ワクチン接種を受けることをおすすめしています。（かかったことがあるかどうかを抗体検査で調べることもできますが、必須ではありません。）

なお、より免疫を確実にするために2回の接種が必要とされています。

予防接種を受けたとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります（アナフィラキシー・ショック）。万一のために15分程度は医院の中にいていただき、その後もしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしてみてください。（その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさけられます。）

おたふくかぜワクチンは、弱毒化してある生ワクチンです。

ほかの予防接種は、4週間以上（※）たってから受けてください。

※接種の翌日から次の接種日の前日まで27日以上

おたふくかぜ予防接種

任意接種：生後12か月以上

※日本小児科学会では2回接種を推奨しています。

1回目：1歳以上

2回目：5歳以上7歳未満

おたふくかぜワクチン

①今日は激しい運動は避けてください。**入浴はかまいません。**

②注射したところが赤くなったり、腫れることはほとんどありません。

③2～3週間後に、まれに**髄膜炎**をおこすことがあります。高熱、頭痛、嘔吐などの症状がでたら、診察を受けて下さい。（通常は軽くすみ、後遺症なく治っています。）